

アレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法

福井勝山総合病院  
耳鼻咽喉科 杉本千鶴



近年、くしゃみ・鼻水・鼻づまり・目のかゆみなどのつらいアレルギー症状でお困りの患者さんが、次第に増えつつあると思われる。アレルギー症状改善のための基本は、アレルギーの原因となる物質(アレルゲン)を避けることです。



アレルギー性鼻炎の治療法としては、一般的には症状に合わせた内服薬や点鼻薬の使用、それでも改善が乏しい場合は手術による治療があります。これらとは別の治療法として、アレルゲンを体内に少量ずつ取り入れて、体質を変えていく減感作療法(アレルゲン免疫療法)があります。

簡便で続けやすい

舌下免疫療法

減感作療法といえは以前は注射による治療法が主流でしたが、治療法の開発により日本では2014年から舌下免疫療法

法が開始されました。

舌下免疫療法は、アレルゲンが配合された治療薬を毎日「舌の下」にしばらく含んでから飲み込み、少しずつ体質を変えていきアレルギー症状を和らげていくという、より簡便で続けやすい方法です。現在は、スギ花粉とダニに対する治療薬があります。最低3年間は毎日治療薬を飲み続ける必要があります。根気のいる治療法です。治療効果の程度は患者さんによって様々で、効果がでない場合もあります。



治療の開始時期は、スギ花粉は6月から12月までのスギ花粉が飛ばない時期で、ダニは1年中いつでも開始できます。5歳以上の小児から治療可能ですが、重症の気管支喘息の方など治療を受けられない場合もあります。

舌下免疫療法をご希望される患者さんは、ぜひ耳鼻咽喉科でご相談ください。

自己ベスト更新に向け走り続ける



(写真左から) 黒原さつきさん(勝山中部中2)、印牧仁菜さん(勝山南部中3)、木下ゆきさん(勝山北部中3)

市内の陸上競技クラブ「勝山アスリート」に所属する3人は、黒原さんは800m、印牧さんは1000mハードル、木下さんは1000mを専門とし、それぞれの種目で今シーズン県内中学ランキング1位の記録を持つ県内でも屈指のアスリートです。



夕方から始まる練習風景(鹿谷小学校グラウンド)

「自己ベストが出たときの達成感がとても嬉しく走っています」と小学校から続けてきた陸上競技への魅力を語る3人は、陸上競技に打ち込む仲間として、週5日の厳しい練習にも一緒に乗り越えてきたそうです。黒原さんと印牧さんは、今月下旬に愛媛県で開催されるジュニアオリンピック(U16陸上競技大会)に出場予定で、「自己ベストを目指し、楽しく走ってきたいです」と笑顔で抱負を語っていました。3人は、今後も北信越大会や全国大会での入賞を目指し、陸上競技を続けていくそうです。風を切るように走る3人の活躍がとても楽しみです。

自然と向き合い、幸せを考えてみませんか



(右)野坂 弦司さん(84)=北郷町森川= (左)ソナム チョキさん(27)=北郷町森川=

野坂さんは、昨年、福井市から鹿谷町保田に移転した「認定NPO法人 幸福の国 ブータンミュージアム」の創立者で、現在はミュージアムの説明人として活動されています。また、ブータン出身のソナムさんは、ミュージアムの隣にある音楽喫茶や農家民泊を経営する会社に勤務されています。「勝山の風景は、ブータンととても似ています」と話す野坂さん。以前は、市街地のビルの中にあつたミュージアムを、より自然豊かなブータンミュージアムに移転した。野坂さん自身もミュージアム移転後に勝山に移住され、コロナ禍でも定期的に訪れるお客さんや地域の方と交流を深めながら、楽しい日々を過ごされています。ブータンの人々は、厳しい自然の中でも、みんなで支え合うことで、幸せな暮らしをされています。勝山の方々にも、ブータンのことを知ってもらい、本当の幸せはどこにあるかを考えるきっかけにしたいと思います」と素敵な笑顔のお二人からは、幸せが溢れでていました。



蔵を改築してつくられたブータンミュージアム

ふるさとを訪ねて

地域文化を掘り起こそう

46

市史編集室 山田 雄造

小笠原家の菩提寺開善寺

開善寺は南を除き周囲は石垣で囲まれている。西側の石垣は七里壁の一部で市の文化財となっている。19世紀初期の史料に「大蓮寺之方川縁石垣崩など、東から西に向け大蓮寺川が流れその浸食を受けるためか、「開善寺石垣」を築く史料が度々見られる。場所がよくわからないが「開善寺坂石垣」などともある。現在見る市内の七里壁の石垣より古い時代から開善寺周囲には石垣が築かれていたようである。

開善寺には市の文化財として「初代貞信の徒然草断簡」「長教勝山十二景木額」、そして「勝山藩主小笠原家廟所」も史蹟の指定を受けている。廟所の東には貞信以下歴代藩主(一部奥様の名も記名)墓が7基建つ。それを取り囲む形で南北と西には一族の墓も建つ。



小笠原家廟所

以下は余り知られていない開善寺の仏像に関わるものである。同寺は元禄4年(1699)、



摩利支天像

貞信が美濃高須から勝山に移り、その時、広南和尚が随伴して勝山開善寺が創建された。織田頼行氏の論文によると、歴代の小笠原氏は入部先で開善寺を創建し、摩利支天像を安置した。摩利支天像は威光を神格化した仏法の守護神として知られ、戦国武将は軍神として崇めたそうです。勝山の開善寺にも摩利支天像は河灌権現像を囲む形で、弁才天像とともに安置されている。木造の非常にいかめしいお姿の像である。製作は弁才天像と同じ宝永5年(1708)、靈空和尚の時代と考えられる。同像と同じく摩利支天像にも框裏書に同和尚の名前が見られるからである。仏師は宗運とある。

開善寺は現在無住であるが、年二回清掃活動などが行われていますのでご協力をお願いします。